

# 企業の社会的責任の歴史的考察

大田 博樹

2015年の9月、ニューヨークの国連本部で「国連持続可能な開発サミット」が開催され、150以上の加盟国の参加のもと、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。地球上の誰一人として取り残さないことを掲げ、世界を変えるための17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs）」が設定されたことは、まさに世界が一丸となって社会的課題に取り組む機運が高まったと感じる出来事だったのではないだろうか。このような世界的な取り組みに対して、企業はどのように関わっていくことができるのか。企業の社会的責任の本質について再考する良いタイミングだと思われる。

2019年4月に神奈川大学国際経営研究所のプロジェクトの一つとして「企業の社会的責任の歴史的考察」を3年間の予定で立ち上げることとなった。1年目は各研究員の研究テーマに沿って研究を進めるとともに、月に1回のペースで倫理を中心とした共通図書を決め、研究報告会を行った。また、9月には、夏季休暇を利用して神奈川大学箱根保養所にて「日本におけるCSR概念の歴史」に関する情報交換を目的に外部講師を招聘した調査研究会も開催した。このような泊まり込みでの勉強会は、今でも良い思い出となっている。

2年目も引き続き、各メンバーが自身の研究テーマに沿って研究を進めることとしたが、研究報告会については、コロナの感染防止のため6月よりzoomを使った遠隔方式での研究報告会を開始し、月に1回ないし2回のペースで開催した。また、9月には外部講師を招聘し、「社会事業の無駄打ち問題－行政と企業にみるNPO設立とCSRの陥穽－」をテーマにzoomによる研究報告会も行った。

3年目も遠隔方式での研究会とし、各メンバーが報告書作成を念頭に研究テーマを絞り込み、それぞれの目的に沿った形で研究報告を行った。最終年度だったこともあり4月から多い時は月に3回ほど研究会を積極的に行った。本プロジェクトでは、当初は外部への発表を含めて研究成果をまとめること

を想定していたが、プロジェクト期間の三分の二以上が新型コロナウイルス蔓延のタイミングと重なっており、途中で急遽遠隔形式の研究会での開催になったこと、また研究メンバーの中には慣れない大学での遠隔授業に対応するなかでの研究・執筆となったこともあり、当初の計画通りに研究が進まなかったメンバーもいた。しかしながら、本プロジェクトでは企業の社会的責任という壮大なテーマに対して、各領域の研究者とともに論考を重ね研究の機会を持つことができたことは私たちにとって貴重な経験となり、今後の研究を進めるうえでの糧となったことは間違いない。